

令和7年度自己評価及び学校関係者評価書

令和8年2月12日
江別市立野幌小学校

1. 学校教育目標と本年度の重点目標

《学校教育目標》

○こころやさしく、けんこうな子(情・体) ○みずからかんがえ、やりぬく子(知・意)

《重点目標》 ◎力強く 夢に向かう 野小っ子 「かしこく やさしく 元気よく」

2. 自己評価結果に対する学校関係者評価

分野	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		達成状況	○分析結果 ■改善の方策	達成状況の適切さ	改善の方策の適切さ
経営方針の重点	① 特認校としての特色ある教育課程の編成・実施と学習指導の充実 ■肯定的回答 80%	A	○特認校の特色である「原始林学習」や「栽培活動」を継続し、保護者の97%から高い肯定評価を得た。児童の73.7%が愛林少年団活動(縦割り班)に楽しく参加しており、異学年交流を通じた主体性が育っている。 ○一方で、保護者からは「特認校らしさ」の維持を求める声や、ICT活用の意義(紙のドリルとの使い分け)に関する疑問も寄せられている。 ■ICTを「記録・比較」の段階から「他者との深い学び合い」へと昇華させる活用モデルを構築するとともに、登下校時の荷物の重さ軽減に向けた「置き勉」の検討など、児童の健康と安全に配慮した特色ある活動を推進します。	A	A
	② 愛林少年団活動の活性化と豊かな心の育成 ■肯定的回答 80%	A	○愛林少年団活動を通じ、思いやりや規範意識を高める指導に努め、保護者の98%から肯定的な評価を得た。 ○礼儀指導(あいさつ・返事等)に対する教職員の自己評価も年度後半に上昇し、指導の定着が見られる。児童のいじめ早期発見に向け、ICTを活用した月1回の「生活アンケート」を導入し、相談体制の整備を進めてきた。 ■小中一貫教育の視点を取り入れ、児童が「将来への見通し」や「夢や目標」をより具体的に持てるよう、将来の地域活動への参画意欲を育むための支援を強化します。	A	A

<p>③</p> <p>確かな学力の確実な定着</p> <p>■肯定的回答 80%</p>	A	<p>○対話」と「振り返り」を柱とした授業改善を推進し、教職員の自己評価では思考力・判断力・表現力の育成に確かな手応え(4.29点)を得ている。</p> <p>○全国学力調査等では、算数・理科で全国平均を上回る成果が見られる一方、国語の「言葉の特徴」や、各教科の「記述式問題」に課題が残る。また、家庭学習の習慣化(児童質問紙:6年の学習時間が1時間以上35%)が依然として課題。</p> <p>■「書く活動」の意図的な設定と、ICTを活用した多角的な意見交換(価値交換)を推進するとともに、家庭学習の手引きの活用や丁寧なチェックを通じて、学校と家庭が連携した学習習慣の定着を図ります。</p>	A	A
<p>④</p> <p>体力向上の取組と保健・安全・食育の指導</p> <p>■肯定的回答 80%</p>	A	<p>○新体力テストの結果に基づき、「野小タイム」「野小ラン」を通じた体力向上や、栄養教諭による食育授業、学校園での栽培活動を計画的に実施し、保護者の95%が肯定的に評価している。</p> <p>○教職員の自己評価では本項目が相対的に低く、活動の時期や内容の再検討が必要とされている。</p> <p>■児童の健康・安全に直結する登下校時の荷物軽減への再確認を行うとともに、朝食摂取率100%の維持や基本的な生活習慣の定着に向けた家庭への啓発を継続し、「元気よく」活動できる基盤を強化します。</p>	A	A
<p>⑤</p> <p>学校における働き方改革の推進</p> <p>■肯定的回答 80%</p>	A	<p>○教職員の教育意欲は4.70点と非常に高いものの、勤務時間を意識した働き方は3.60点と全項目で最低値であり、大きな課題となっている。保護者からも教員の超過勤務を懸念する声や、行事の振替休日の設定を望む意見が寄せられている。</p> <p>■次年度は「働き方改革コアチーム」を中心に、会議数の削減や事務作業のICT化を加速させる。</p> <p>■保護者・地域が寄せる学校への期待を踏まえつつ、学校行事の精査と時期の見直しを組織的に行う。また、保護者にも「支え手」としての参画を促し、持続可能な学校運営体制を構築します。</p>	A	A

	<p>⑥ 保護者・地域・他機関との連携と協力 ■肯定的回答 80%</p>	<p>A</p> <p>○学校だより、ホームページ、テトル等を用いた積極的な情報発信により、保護者の 95%から理解を得ている。 個人懇談や電話連絡等の相談体制についても 97%が高い満足度を示している。</p> <p>■欠席連絡や時間割配信における「テトル」の利便性向上を図るとともに、学習発表会の座席配置など、保護者からの具体的な要望を真摯に検討し改善につなげる。さらに、学校を「受け手」としてみるだけでなく、保護者自身が能動的に関わるパートナーシップの形成を目指します。</p>	A	A
<p>教育課程</p>	<p>⑦ 地域素材・人材の活用、原始林の活用等、学ぶ楽しさを味わうことのできる教育活動の推進 ■肯定的回答 80%</p>	<p>A</p> <p>○特認校としての特色である原始林学習や愛林少年団活動は、児童の 86%が「楽しく参加している」と回答し、教職員の自己評価(4.30 点)でも安定した運用が確認されています。保護者からも、行事や学習に生き生きと取り組む姿に対し 97%の肯定評価を得ており、学ぶ楽しさを味わう活動は着実に推進されました。</p>	A	A
<p>学習指導</p>	<p>⑧ 習得・活用・探求の場を設定し、合同授業や交換授業など指導体制の工夫・改善を図る ■肯定的回答 80%</p>	<p>A</p> <p>○研究の柱である「対話」と「振り返り」を重視した授業改善が進み、教職員の自己評価では思考力・判断力・表現力の育成に高い手応え(4.29 点)を得ています。特に「全ての児童に活躍の場を設ける」意識は 4.57 点と極めて高く、少人数指導や支援員の活用による一人ひとりのに合わせた学びができるように、指導体制が定着している。</p> <p>■理科や算数で全国平均を上回る成果が出ている一方、「数量の関係を言葉や式で説明する」「他者の発言の意図を読み取る」といった記述式・高次思考問題に課題が見られます。今後は、ICTを単なる記録に留めず、「他者との深い価値交換」に繋げる活用モデルを構築し、図表と言語を組み合わせた説明力の育成を重点的に進めます。</p>	A	A

	<p>⑨ 野小アプローチの確立、家庭学習の定着等により、学習習慣の確立を図る ■肯定的回答 80%</p>	<p>B</p> <p>○授業内での「対話」を通じた学びのスタイル（野小アプローチ）は定着しつつありますが、家庭学習への波及に課題がある。保護者アンケートでの家庭学習肯定回答は 58%（前年比 21%減）と大幅に低下し、児童の家庭学習の習慣化が課題である。ICTを活用した課題の学習効果に対する疑問や、教員のフィードバック（コメント・印）の充実を求める保護者の声も顕著。 ■家庭学習を「自ら考え、やり抜く力」を育む時間と再定義し、「家庭学習の手引き」の活用徹底と、ICT 活用の質の向上（紙ドリルで代替できない探究的課題の設定）「確認印」などの簡潔な反応（フィードバック）を組織的に行い、児童のモチベーション維持と学校・家庭の連携強化に努めます。</p>	B	A
生徒指導	<p>⑩ 異学年の集団活動や縦割り班（愛林班）活動を通して好ましい人間関係を構築させる ■肯定的回答 80%</p>	<p>A</p> <p>○愛林少年団活動において、児童の 86%が「楽しく参加し、一生懸命取り組んでいる」と回答しており、異学年交流が好ましい人間関係の基盤となっている。保護者の評価も極めて高く、98%が「思いやりや命を大切に作る心、規範意識を高める指導」を肯定している。教職員もこれらの独自活動が安定して実施されていると評価している（4.30 点）。 ■縦割り班活動を継続し、責任感や思いやりの心を育みます。異学年交流の場を「将来の夢や目標」について語り合ったり、地域社会との関わりを意識したりする機会へと広げ、小中一貫教育の視点を取り入れた指導を強化します。</p>	A	A
	<p>⑪ 日頃よりいじめの実態把握に努め、組織的に迅速に対応する体制をより強固にする ■肯定的回答 80%</p>	<p>A</p> <p>○「生活アンケート」が定着し、いじめの早期発見や児童の悩み把握、相談体制の整備が進んでいる。児童の 100%がいじめはいけないことだと認識しており、85.8%が「先生や学校の大人にいつでも相談できる」と回答している。保護者の 90%が学校の適切な指導を認めているが、昨年度より肯定回答が低下している点は留意が必要である。 ■「全ての教職員で全ての子どもを見守る」体制を継続し、「なかよしアンケート」で吸い上げた SOS に対して、担任だけでなく複数の教職員が自ら選択された相談相手として迅速に対応する仕組みを堅持する。さらに、問題解決のプロセスを保護者と丁寧に共有することで、さらなる安心感と信頼の構築に努めます。</p>	A	A

教職員・保護者・地域の連携	⑫ 教職員全員が児童全 員を指導する体制を 構築し、こころのふれ あいを大切にする ■肯定的回答 80%	A	○「全ての教職員で全ての子どもたちを育む」という合言葉のもと、教職員の教育意欲は 4.70 点と非常に高く、保護者の 95%からもその熱意を認められている。個人懇談や電話連絡等の相談機会についても、保護者の 97%が「適切に設けられている」と高く評価している。 ■少人数学級の特性を活かし、担任以外の職員（心の教室相談員、スクールカウンセラー、養護教諭等）も交えた多角的な見守りを継続する。教職員の多忙感が課題（3.60 点）となっているため、組織的な情報共有の効率化を図りつつ、児童一人ひとりとの「心のふれあい」の質を維持・向上させるためのゆとりを生み出す業務改善を推進します。	A	A
	⑬ 学校・家庭・地域が連 携・協力して共に子ど もたちを育てるとい う考え方を共有して日 常の教育活動を推進す る ■肯定的回答 80%	A	○学校だよりやホームページ、テトルを通じた積極的な情報発信に対し、保護者の 95%が「わかりやすい」と評価している。また、保護者からは「学校はサプライヤー、保護者はカスタマー」という構図を超え、保護者自身も能動的に参画すべきであるという心強い意見も寄せられている。 ■「テトル」を活用した欠席連絡や時間割配信など、保護者の利便性を高める仕組みを検討・導入します。また、家庭学習の習慣化に向けて、学校での学びを家庭へ繋げる「家庭学習の手引き」の活用について懇談会等での交流を深め、学校と家庭が同じ歩調で子どもを支える連携を一層強めていきます。	A	A
	⑭ PTA 活動・育成会等 の地域の活動に進ん で協力し、協調関係を 深める ■肯定的回答 80%	A	○餅つき会などの伝統行事や学習発表会の座席改善など、保護者からの具体的な要望を学校運営に反映させようとする姿勢が見られる。特認校としての魅力を維持するために、保護者や地域との協力関係は不可欠であるとの認識が共有されている。 ■保護者の能動的な参画を促し、学校行事の時期や内容について保護者の意見を反映させながら検討する。地域素材や人材の発掘（読み聞かせボランティア等）においても連携を深め、地域全体で「野小っ子」を育てる体制を充実させていきます。	A	A

<p>体力づくり</p>	<p>⑮ 体育の授業や全校的な外遊び、野小タイムなどの体力の向上と健全な心身の育成を図る ■肯定的回答 80%</p>	<p>A ○新体力テストの結果、学校全体で男女共に前年度の記録を上回る学年が多く見られ、5年生男子は4項目、女子は6項目で全国平均を上回る成果を上げた。保護者の95%が学校の体力向上や安全・食育への取り組みを肯定的に評価しています。一方で、学校全体として「反復横跳び」や「50m走」で昨年を下回る学年が多かったことも事実。教職員の自己評価(項目5)は4.10点と全項目の中で最も低く、取り組みのさらなる充実や時期・内容の再検討が必要とされる。 ■「体力向上プラン」に基づき、全国平均を下回った種目(反復横跳び、50m走等)に重点を置いた「体力を高める運動」や「野小タイム」を継続的に実施します。外部講師による「走り方教室」を運動会前に実施し、運動の楽しさとコツを習得させています。また、教職員の評価が相対的に低いことを踏まえ、活動内容を精査して効率的かつ効果的な指導体制を再構築するとともに、保護者から指摘のあった「登下校時の荷物の重さ」などの健康・安全面への具体的配慮も進めます。</p>	<p>A</p>	<p>A</p>
<p>小中一貫教育</p>	<p>⑯ めざす子ども像を明確にし、9年間の系統性を明らかにした学習・生活規律の確立を図る。 ■肯定的回答 80%</p>	<p>A ○教職員の自己評価において「中学校区のみまりの遵守(4.30点)」は年度後半にかけて上昇しており、指導の定着が見られます。中学校区共通の質問項目である「夢や目標に向かって、生活や勉強の仕方を工夫して頑張っている」という児童の回答も、肯定評価が84%と高い水準を維持している。しかし、その中で「そう思う(ア)」という強い肯定回答が7月の45%から11月には35%へと低下している点は、意欲の持続という面で注視する必要がある。 ■中学校区共通の指導スタンダードに基づく規律の定着を継続しつつ、子どもたちが「将来の夢や目標」を自分事として捉えられるようなキャリア教育的視点を強化します。重点目標である「夢に向かう野小っ子」が、教職員から与えられたものではなく、子どもたちが自ら目指す姿となるよう、日常の学習や生活規律がどのように将来の可能性に繋がるのかを実感させる働きかけを行います。特に、肯定回答が低下傾向にある高学年層に対しては、小中一貫教育の枠組みを活かし、中学校生活への円滑な接続と将来への見通しを持たせる活動(中学校教員の参入や交流等)を充実させ、主体的な学びの意欲を再喚起します。</p>	<p>A</p>	<p>A</p>

<p>⑰ 児童生徒の課題を共有して教育課程の接続を図る。 ■肯定的回答 80%</p>	<p>A</p>	<p>○「9年間の系統性を意識した教育課程の改善(4.30点)」の教職員評価も向上しており、中学校区内での連携が具体化している。学力面では算数・理科で成果が見られる一方、国語の「他者の発言の背景や意図を読み取る力(本校正答率 20.0%)」や、算数・理科における「数量関係や問いの言語化・記述」に課題があることが明確になっている。</p> <p>■全国学力調査等で明らかになった「他者の意図の読解」や「根拠を明確にした記述」といった本校独自の課題を中学校区全体で共有し、9年間を見通した系統的な指導を推進します。具体的には、研究の柱である「対話(価値交換)」において、単なる話し合いに留めず、ICTを効果的に活用して多角的な視点から自分の考えを再構築(ブラッシュアップ)する場面を意図的に設定します。また、「伸びしろ層・中間層・定着層」の三層に応じた個別最適な支援についても、中学校への引き継ぎをより詳細に行います。各教科における基礎・基本の定着と「考えを組み立てたり、比べたり、根拠をもって説明する力を育むこと」の育成を両立させた教育課程の接続を図ります。</p>	<p>A</p>	<p>A</p>
---	----------	---	----------	----------

【評価】A:よい B:おおむねよい C:ややよくない D:よくない

【評価項目の設定、達成状況および改善の方策に関する学校関係者評価委員の意見】

■「学校に置ける働き方改革の推進について」教職員の年齢層によって求められる働き方は異なると思われる。若手教員や子育て世代の教員など、それぞれに合った働き方が存在する。

■「保護者・地域・他機関との連携」および「地域素材・人材の活用」について

地域の協力体制の変化や人材の高齢化が大きな課題となっている。例えば、これまで学校活動を支えてきた林業技士会は高齢化が進み、後継者不足が深刻である。そのため、学校の原始林を活用した学習活動においても、学校側が求めている内容が十分に実現できているか、慎重に見つめ直す必要がある。

■「小中一貫の取組に関わる話題なのか判断が難しい部分もあるが、いわゆる“中一ギャップ”と呼ばれる問題について、現状を踏まえて考える必要がある。小規模集団である野小から、急に大きな集団規模の中学校へ進学すると、新しい環境にうまくなじめず、疎外感のようなものを抱いたり、新たな人間関係の構築に戸惑ったりする児童がいる可能性は十分に考えられる。こうした移行期の不安を軽減するために、学校として何かできることはないかと感じている。

→子どもたちが安心して中学校生活へ移行できるよう、小中の連携を通して、情報共有や段階的な接続、事前の交流(中学校説明会時)や体験活動の機会(音楽交流会は R8 年度から)など、現状に応じた支援の在り方を検討していく必要があると考えている。